

アラビア半島へ、再び

3年ぶりにアラビア半島の土を踏んだ。ここはオマーンの首都マスカットより1000km南西に位置する町、サララである。今回はアラブ首長国連邦のラス・アル・ハイマ首長国において野菜の節水栽培に関する研究を行った。学生時代より乾燥地農業に関わり、今回が2回目の現地での仕事になるが、再びアラビア半島、しかも隣の国ということもあってアラブには縁があるなど考える今日のごろである。

今回はJICAの専門家として野菜栽培の指導を行うためにやってきた。現場はサララより160km北に位置するネジド農業試験場(NARS)である。この試験場は日本の援助により1994年に建設された。1996年より、すでに我が社より乾燥地農業の専門家が派遣されている。AAINewsに掲載された『ドファールの農業』シリーズもここから発信された。

さて、最初にサララからネジド試験場にむかう際、大変驚かされたことがあった。試験場へ行くにはジャバルという山岳地帯を越えなければならない。山で家畜として飼われているラクダ、ウシに気を付けながらのドライブである。ちょうどモンスーンが明けた時期で山々が緑に覆われ、まるで日本にいるようであった(モンスーン時は霧で数メートル先が見えなくなる)。しかしいったん山を越え、車を少し走らせるとそこは荒野の砂漠である。この対称的な二つの自然がほんの数キロ離れた場所に位置しているとは想像もつかなかった。こちらに来る以前に現地の状況は耳にしていたが、これほどまでに変化が急だとは思わなかった。

山を背にひたすら同じような風景を見ながら一時間ほど車をとばすと、試験場が現れる。回りは何もなく、砂漠の真ん中にぽつんと存在している。乾燥地を持たない日本の研究者にとってはまさにうってつけの環境であろう。我が母校である鳥取大学乾燥地研究センターには今年完成したばかりのアリドドームがある。それはドーム型のガラス室で室内の気象環境を制御でき、乾燥地帯の気候を再現できる。また最新の科学機器が設置され基礎的な研究をするには十分であろう。しかし応用研究となるとやはり現地での調査が必要である。よって研究者や学生がここネジドの試験場を訪れ、日本ではできない研究を行い、試験場ではできない細かい分析等は日本で行う、というような相互補完的な研究ができたなら強く感じた。

幸運にも試験場の牧草担当スタッフが今年10月より奨学生として日本に留学することになった。現在、日本で語学研修を受けているが、その後鳥取大学大学院で学ぶことになる。将来、彼がオマーン農業の発展のため活躍し、また日本とオマーンの友好関係が更に深まることを望むものである。

(オマーンにて：飯山)



緑に覆われた山岳地域・ジャバル



カウンターパートMr.Gahzey(NARS野菜圃場)